

Mさん（S小学校）

## ちいちゃんに思いを寄せ、戦争の悲しさを実感し、 平和を希求する子どもの育成に関する実践

はじめに

### 一 研究内容（授業の実際と考察）

### 二 本単元の学習を通して

はじめに

一昨年、初めて3年生の担任となった。そこで、「ちいちゃんのかげおくり」という作品と出会った。初めて読んだ時、なぜか泣けてきた。それは、この作品がとても素晴らしいものであるということとともに、自分の娘がちいちゃんと、息子がちいちゃんのお兄ちゃんと同じ年頃ではないかと想定したことで感情移入がなされ、この作品の情景をリアルに思い浮かべることができたからではないかと考えた。

多くの日本人にとって、戦争が遠い存在になってきた。戦争を知らない私たちの世代が親となってきている。幸い、日本は平和憲法の下、戦禍に見舞われることなく生活をしているが、地球上では、今でも戦乱が続き、多くの「ちいちゃん」を生み出している。

戦争について、或いは平和について考えることは、大人でも難しいのではないかと時代と重なってしまった。小学3年生なら尚更難しいのではないかとも思うが、まず、この作品が素晴らしく、私自身が惚れ込んでしまった。この作品を通して、子どもたちに戦争の悲しさ、切なさ、悲惨さを伝えることはできないかと思った。それには、自分自身が感情移入することで戦争の悲しさを実感したように、子どもたちも、自身と同じ年頃のちいちゃんの様々な場面での気持ちを考えることで、ちいちゃんに思いを寄せ、戦争の悲しさを実感し、そこから平和を希求する思いを育むことができるのではないかと考えて実践を行った。さらに、この作品にはオペレッタがあり、ちいちゃんに感情移入をすることで、気持ちを込めて、精一杯歌う姿が期待できるのではないかと考えた。

### 一 研究内容（授業の実際と考察）

#### 1 「感想を発表しよう。」（初感の発表）

M児：空の上で、お父さん、お母さん、お兄ちゃんと会えたけど、小さな女の子の命が空に消えてしまってかわいそう。

N児：ちいちゃんは死んじゃっても、空の上で幸せになれたのでよかった。

O児：空が最初はかげおくりができたところだったけど、かげおくりができないところになって、怖いところになってしまった。

P児：ちいちゃんは、お母さんとはぐれてしまったけれど、空の上で会えてよかった。

G児：はぐれて寂しかったけど、空の上でお父さん、お母さん、お兄ちゃんと会えてよかった。

A児：「広い空は楽しいところではなく、とても怖いところになりました。」というところが一番怖い。

B児：知らないおじさんが、ちいちゃんをだいて走ってくれていい。

C児：ちいちゃんが、お母さん、お兄ちゃんとはぐれて一人ぼっちになった時、はす向かいのおばさんに会えてよかった。

D児：戦争はもうおきないで欲しい。

E児：昔は戦争があつて、みんな大変だった。

F児：ちいちゃんとお兄ちゃんは、まだ子どもなのに、戦争で命を落としてしまってかわいそう。

G児：昔は爆弾を積んだ飛行機が日本にも来たのに、今は来なくなってよかった。

H児：爆弾が落ちるから、もう戦争は嫌だ。

A児：「川の方へ逃げるんだ。」と言った人は、人を大事にしている。

I児：ちいちゃんは、まだ小さい子どもだったけど、逃げ切ったのに、最後に死んでしまつてかわいそう。

J児：お母さんと必死で逃げていたのに、はぐれてしまつてかわいそう。

K児：お母さんとはぐれて、一人ぼっちになつてしまつてかわいそう。

L児：ちいちゃんは、戦争で小さい時に死んでしまつてかわいそう。

【考察】初感を考え、発表し合った。多くの子どもたちは、戦争の悲しさや怖さを感じているようであるが、ここでの発表を聞いていると、初感ということもあり、具体的でなく、抽象的である。B児は、この後の学習により、多くのことを学んでいく。また、L児は本時も含めて最初はやや消極的であったが、学習が深まるにつれて深く考えるようになっていく。

## 2 戦争で、ちいちゃんのまわりから失われていったものは何でしょう。

(1) 第一場面 (家族そろつてのかげおくり)

F児：楽しい空。

L児：楽しい広い空

C児：家族四人でした楽しいかげおくり。

L児：お父さん。

G児：戦争に行った人の命。

N児：体の弱い人たち。

I児：よく晴れた空。

D児：かげおくりのできる空。

P児：青い空。

T (教師)：楽しい空が暗くてとても怖い空になつたんだね。

(2) 第二場面 (ひとりぼっちになつたちいちゃん)

E児：町の多くの人たち。

F児：知らないおじさん。

G児：まわりの家や建物。

L児：お母さんとお兄ちゃん。

C児：町と家とお店。

A児：他の子どもの命。他のお母さんの命。

L児：かげおくりをやっていた頃の明るさ。

(3) 第三場面 (お母さんとお兄ちゃんを待ち続けたちいちゃん)

Q児：家。

J児：食べ物。

A児：飲み物。

B児：はす向かいのおばさん。

D児：今まで住んでいた町。

G児：ちいちゃんの周りの住人。

A児：お兄ちゃんとちいちゃんの部屋。

R児：防空壕。

B児：ちいちゃんの体力。

(4) 第四場面 (ひとりぼっちのかげおくり)

P児：ちいちゃんやその他のたくさん子どもや大人の命。

N児：ちいちゃんや他のたくさん小さな子どもたちの命。

G児：ちいちゃんの命。

F児：食べ物。

L児：いろいろな人たちの命。小さな女の子の命。

C児：ちいちゃんやちいちゃんぐらいの小さな子どもの命。

B児；ちいちゃんの意識。

A児：夢や希望。

### 3 第一場面の「かげおくり」は、どんな「かげおくり」だったでしょう。

- ・みんな楽しそう。(14人)
- ・みんな一緒。
- ・うれしい。(2人)
- ・お父さんの教えてもらってうれしい。(2人)
- ・お父さんが戦争に行ってしまう前に新しく覚えた遊び。
- ・驚いた。(3人)
- ・ちいちゃんとお兄ちゃんが「すごうい。」と驚いた。
- ・喜んでいる。
- ・ちいちゃんもお兄ちゃんも喜んでいる。
- ・ドキドキしている。(2人)
- ・一人でなく家族みんなでやっている。(2人)
- ・家族みんなで手をつないでいる。

T (教師) : 楽しく、明るく、「すごい。」と驚いたかげおくりだったんだね。この後、どうなっていくのかな。

- ・お父さんが戦争に行ってしまう。
- ・お兄ちゃんとちいちゃん2人のかげおくりになる。
- ・かげおくりができなくなる。
- ・とても怖い。暗くなる。

#### 4 ちいちゃんは、どんな気持ちだったのか。

##### (1) ちいちゃんは、お母さんとはぐれました。「お母ちゃん、お母ちゃん。」

- ・お母さんがいなくなって、さみしい。(3人)
- ・一人ぼっちになったら、どうしよう。(2人)
- ・お母ちゃんとお兄ちゃんとはぐれちゃった。どうしよう。(2人)
- ・お母ちゃんとお兄ちゃんはどこへ行ったんだろう。(8人)
- ・一人じゃ行けない。探さなきゃ。
- ・こわいよう。
- ・もうお母ちゃんと会えないかもしれない。どうしよう。
- ・お母ちゃんがいないと嫌だ。

【考察】気持ちを考える際、吹き出しに気持ちを書くようにした。それにより、様々な意見が出始めた。また、「はぐれた」ということは、子どもたちも「寂しい」「どうしよう。」「怖い。」「嫌だ。」などの意見が出た。これらの意見の根底には、ちいちゃんの不安な気持ちを想像することができたのではないか。

##### (2) お母さんらしい人が見えました。「お母ちゃん。」

- C児：お母さんらしい人がいたからうれしい。(H児、B児、Q児)  
P児：あ、お母ちゃんだ。(S児) E児：あれはきっとお母ちゃんだ。  
N児：お母ちゃんがやっと見つかった。ここにいたんだ。  
J児：お母さんがいる。よかった。(D児、F児、T児)  
O児：お母さん、こんなところにいたのか。(I児)  
T児：お母ちゃんがいた。よかった。(E児)  
R児：お母ちゃん、私を置いてどこに行っていたの。  
T (教師) : 前と比べてどうでしょう。  
A児：この前とは違って、お母さんらしい人が見えた時は、ものすごくうれしそうだし、声もうれしそう。  
R児：もう怖くないぞ。  
G児：とても安心。(F児も)  
P児：ホッとしている。  
B児：デパートで迷子になった時、見つかった時のよう。  
A児：迷子になった時、見つかった時のようにものすごくうれしい。  
G児：見つかった時、泣きながらうれしかった。  
N児：わたしは、その時、ホッととして、お母さんにだきつきました。

T：しかし、それはお母さんだったのかな。

児童：違った。

T：そうだね。お母さんではなかったね。ちいちゃんは、また一人ぼっちになってしまったね。その時、ちいちゃんはどんな気持ちだったかな。

L児：この後、どうすればいいんだ。

Q児：一人じゃ何もできない。どうすればいいんだ。(J児、I児)

K児：見つからなかったらどうしよう。心細い。

C児：おじさんもない。どうしよう。

B児：また、迷子になっちゃった。(T児)

P児：知らない人ばかり。お母さんでもないし。すごく悲しい。

N児：また一人になるのはいやだ。

K児：もう会えないのかな。

F児：これからの人生はどうするんだ。

L児：お母ちゃんと会えなかった。私はどうなるんだ。

N児：また一人ぼっちになっちゃった。これからの人生どうするんだ。

L児：さっきのところに付け足して、死んじゃうのかな。

J児：もうずっと会えなかったらどうしよう。

【考察】はぐれた後に、お母さんらしい人を見かけた時のちいちゃんの気持ちを考える場面である。はぐれて「さみしい。」などと考えていた子どもたちが、お母さんに会えて「うれしい。」という気持ちをちいちゃんに寄り添って語ってくれた。B児がデパートで迷子になったときの自分の気持ちを想起して発表してくれたことで、その後も同様な自分と重ねた意見が出た。県教研で、「デパートの迷子と重ねたことで気持ちを考えることはいかがなものか。」というご意見もいただいたが、小学3年生が、ちいちゃんの不安でせつない気持ちを「自分のこと」としてとらえるためには、この体験で十分ではないかと考えた。要は、遠い戦争の辛さ、切なさを、小学3年生の子どもなりに、実感を伴って考えることが大切であり、そのためには、「自分のこと」としてとらえられることが必要であり、実際、このB児の発言から、自分と重ねて意見を述べる子どもが増えた。これらの姿より、子どもたちはちいちゃんの情景を思い浮かべ、意味を考えることができていたと考える。しかし、子どもたちの中で「お母さんと会えた」という雰囲気になっていたので、叙述に戻すために「それはお母さんだったのかな。」という発問をし、会えなかったこと、そして、その時の気持ちをさらに考えるようにした。どの子どもたちも、「どうすればいいんだ。」「どうしよう。」「死んじゃうのか。」など、ちいちゃんがより不安を感じていることを実感できたのではないか。

(3) 家があったところにもどりました。

G児：私を捨てる人じゃない。絶対もどってくる。  
A児：お母さんは優しい人だから、私をすてるない。  
D児：早く帰ってきてよ。悲しいよ。(2人)  
B児：寂しいよ。  
N児：絶対に会える。  
K児：帰ってくるに決まっている。  
P児：絶対に帰ってくる。それまでがまん。(T児)  
L児：私だって帰って来れた。だから、ぜったいに帰ってくる。(J児)。  
G児：絶対に帰ってきて。  
F児：おばちゃんに連れてきてもらって、せっかく帰ってきたのに、家が焼けて、お母さんとお兄ちゃんがないなんて。  
R児：私をおいてどこへ行ったの。早く帰ってきてよ。  
E児：二人がいなくて寂しいし、これからどうやって生きていけばいいの。(3人)  
L児：せっかく建てた家なのに戦争で壊されて悲しい。

【考察】不安を感じたちいちゃんが家のあるところに戻り、けなげにお母さんやお兄ちゃんを待つ場面である。不安で、お母さんやお兄ちゃんを頼りたいちいちゃんの気持ちを様々な言葉で表現している。ここでも自分をちいちゃんに重ねて考えているのではないか。だからこそ、「絶対もどってくる。」「絶対に会える。」「帰ってくるに決まっている。」あるいは、「絶対に帰ってきて。」という強い表現の意見が多かったのではないか。先ほどのデパートでの迷子の体験と同じように、「自分が一人だったら」と「自分のこと」としてとらえ、ちいちゃんの気持ちを考えていたのではないか。

5 二つの「かげおくり」を比べて、同じところには線、違いがよく分かるところには二重線を引きましょう。

○第一場面のかげおくりの叙述と第四場面のかげおくりの叙述を対比し、同じ叙述と違いがよく分かる叙述に線を引き、それに基づいて、2つの場面の違いをとらえた。

第一場面

- ・家族そろっている。
- ・楽しい。(4人)

第四場面

- ・すごく悲しい。
- ・一人ぼっちだから嫌だ。
- ・一人だから寂しい。(2人)
- ・一人だから寂しい。悲しい。

6 どちらの場面のちいちゃんがよりうれしいと思いますか。

(1) 第一場面の方がうれしい。

A児：家族みんながいるので、一番楽しかった。(K児、J児)  
E児：本当の、生きている家族だから。  
F児：私だったら、家族がいないといや。(N児)  
D児：ぼくだったら、家族がいた方がいい。

(2) 第一場面の方がうれしくない。

C児：この後戦争が起こるから、第一場面はうれしくない。(G児)

(4) 第四場面の方がうれしくない。

K児：一人のかげおくりだから。  
B児：おかあさんたちに会えるけれど、一人でふらふらしている。弱っている。  
E児：家族のかげというのは、本当に生きている家族ではない。  
N児：私だったらいや。ちいちゃんは一人ぼっち。お父さんとお母さんとお兄ちゃんはいない。

(5) 第四場面の方がうれしい。

L児：一人ぼっちでつまらないけれど、久しぶりに家族の声が聞こえたし、みんなに会えた。  
Q児：最後には家族に会えてうれしい。  
R児：空で見守っていて、久しぶりに声を聞いたので。  
C児：家族に会えたから。(G児)

【考察】 昨年は、最初は両方の意見があったが、すぐに「第一場面の方がうれしい。」という意見でまとまった。しかし、今年度は、「第四場面の方がうれしい。」という子どもたちが最後までこだわった。特に、最初はやや消極的であったL児がこだわった。L児は「久しぶりにみんなに会えた。」ということを根拠に第四場面にこだわり、それを受けながらC児やG児も同様に意見を変えなかった。そこで、私は、この段階では、昨年同様「第一場面の方が～」というところに落とそうと考えていた。次時に「自分が『ちいちゃん』だったら、どちらの場面の方がよりうれしいですか。」という学習問題で、さらに考えるようにした。

7 自分が「ちいちゃん」だったら、どちらの場面の方がよりうれしいですか。

(1) 第一場面の方がよりうれしい。

E児：第四場面はちいちゃんが死んじゃう。第一場面は死んでしまう前だから。  
B児：第四場面は家族に会えるけれど、死んじゃう。  
F児：第四場面は死んじゃうから悲しい。第一場面は生きている。  
D児：こっちは、家族みんなでするかげおくり。  
A児：第四場面は一人でやっている。それより家族みんなで作る方が楽しい。  
R児：第四場面は死んでしまう。かわいそう。  
I児：第四場面は死んだ後に会っている。第一場面はいっしょに生きていた。  
K児：第四場面は本当には1回も会えていない。第一場面は本当に会えている。

F児：第一場面は家族でかげおくりをしているけれど、第四場面は一人でかげおくりをしながら死んでしまった。

A児：第四場面は死んじゃう。第一場面では、みんなで手をつないでいる。

(2) 第四場面の方がよりうれしい。

G児：ずっと寂しかった。声だけでもうれしい。やっと会えた。

C児：第一場面ははぐれちゃうけれど、第四場面では会える。

N児：いろいろこわいことがあった中で、やっと会えた。

L児：家族と離ればなれだった。これからずっと一緒にいられる。

L児：命を落とすのは悲しいけれど、天国で家族とかげおくりができる。

M児：第一場面では次の日にお父さんが出征して、お母ちゃんとお兄ちゃんとはぐれちゃう。

N児：現実の世界では戦争が続いている。でも、空の上では、現実ではないけれど、戦争はない。

J児：第一場面では、この後家族と会えなくなっちゃう。第四場面では、死んじゃうけど天国で会える。

C児：死んじゃうと悲しいけれど、会えてことはよかった。

N児：みんなの意見を聞いていて変わったんだけど、やっぱり死んじゃうのはよくない。第四場面は明るくない。

【考察】模造紙やレポートにすると、このような表記になるが、それぞれ立場を明確にしてから、話し合った。第一場面の方がうれしいと考える子どもたちは「第四場面は死んでしまっており、みんなで生きていた第一場面の方がうれしい。」と考えている。戦争はちいちゃんから、愛する家族や命まで奪ってしまい、第四場面のかげおくりは、戦争によって命が消えようとする間際の「一人ぼっちのかげおくり」であり、家族そろっておこなうのは「幻のかげおくり」である。したがって、第一場面のほうがうれしく、落とし所と考えていた。しかし、第四場面の方がうれしいと考える子どもたちは「家族と離れ離れでずっと寂しかった。死んじゃうことは悲しいけど、会えてよかった。」と考えている。これは、ここまでの学習の中で、一人ぼっちになった悲しさや怖さを十分に実感したからこそ、子どもたちは「やっと会えた」ことにこだわったのではないか。それぞれの立場の考えを出し合い、それを聞き合うことで、N児のように「みんなの意見を聞いて変わった。」という子どももいたが、多くは変わらなかった。しかし、この話し合いによって、戦争はちいちゃんからお父さんやお母さんやお兄ちゃんを奪い、ついにはちいちゃんの命をも奪ってしまい、最後に命が消えようとしている時にちいちゃんが見たものは、幻ではあるが「家族一緒のかげおくり」であり、それは平和を願う心の象徴であり、子どもたちは、これらを実感することができたのではないかと考えた。



## 8 「ちいちゃんのかげおくり」を勉強して思ったこと、考えたこと。

A児：ちいちゃんは、お母ちゃんとお兄ちゃんに会いたかったけれど、泣かないし、我慢強い女の子だと思いました。ちいちゃんは命をなくした。ちいちゃんだけでなく、他の子どもたちの命も消えて、そのお母さんたちも死んじゃった。だからすごく悲しかった。最初に読んだ時は泣きそうになりました。ちいちゃんは最初にみんなでやるかげおくりだったけれど、戦争でお母さんたちと離れてしまって、一人でやるかげおくりになって悲しかったけれど、最後に会えたからよかったと思いました。お母さんと会えないのはもういやというちいちゃんの気持ちが伝わってくるし、音楽会でもお母さんたちにこの気持ちを伝えたいと思いました。B児：戦争で多くの命がなくなってしまうので、自分だったら戦争は嫌だ。ちいちゃんはお母ちゃんとお兄ちゃんとお父さんと離れちゃったけれど、最後に再会でできてよかった。戦争は前までそろっていた家族が離れてしまうので、自分だったら戦争は嫌だ。戦争は食べ物や家や町がなくなってしまうので嫌だ。戦争がくると、遊べないし、平和なくらしがなくなっていってしまうので、戦争は嫌だ。ちいちゃんたちが遊んでいたかげおくりが戦争のせいでできなくなったので、ちいちゃんたちはかわいそうだ。ちいちゃんたちが戦争によって死んでしまうのに、他の国の人は戦争をやめる気配がないので、他の国の人は何を考えているんだろうと思った。かげおくりをしていて明るかったくらしが最後にはなくなってしまうのが嫌だ。音楽会で歌うのに、授業でやったその気持ちをこめて歌えるのがいいと思いました。

C児：ちいちゃんは、最初は家族4人でかげおくりをして、楽しそうだけど、それから戦争が起こって、ちいちゃんは死んじゃうのでかわいそうだと思います。家族も死んじゃっていたので、本当に勉強したことをまとめるとかわいそう。一の場面とお母さんとはぐれてから、お母さんらしい人がいてよかったというところ以外はちいちゃんの心はずっとしょんぼりしている。命を落とすというのはとても悲しいことなんだと思いました。戦争は二度と起こして欲しくない。

D児：ちいちゃんは一人でお母さんやお兄ちゃん、お父さんたちが帰ってくるまでずっとあきらめずに待っていたから、戦争は死んじゃうだけでなく、家族と離れてすごく悲しいものなんだと思った。

E児：最初ちいちゃんは家族でかげおくりをして、「幸せだな。」と思ったけど、だんだんと勉強していくと、ちいちゃんはお母さんとお兄ちゃんとはぐれたり、第四場面では死んじゃったりするのがさみしい。戦争は一気に町を壊してしまうから、今もし戦争している国があったら大変だし、人の命がなくなると家族も悲しいし、国の人も悲しいから、戦争はとても怖いものだと思います。

F児：私だったら、ちいちゃんみたいな思いをしたくないけど、ちいちゃんは辛くて、嫌な経験をしたなと思った。命の大切さがよく分かった。戦争は嫌なことだと思った。

G児：命の大切さやどんなに一人で生きていくのが大変なのかが分かったような気がする。私だったら、ちいちゃんみたいな生活はやっぱりやだ。ちいちゃんは戦争で死んでしまってかわいそう。ちいちゃんが最後は死んじゃったけど、やっぱり最

後は会えてうれしい。

J児：戦争でちいちゃん、お兄ちゃん、お母さん、お父さんたち、いろいろの家族の命が失われてとても悲しい。戦争が起き、食べ物、建物、飲み物がどんどんなくなって行って、他の家族もなくなっちゃってかわいそうだと思います。戦争はとても怖いし、小さな子どもたちも家族と離れちゃって悲しいと思いました。

K児：ちいちゃんはお母さんとお兄ちゃんがいなくなっちゃった時、よく辛さに耐えてきたと思いました。ちいちゃんは戦争でなくならなかったけど、最後に天国に行っちゃったけど、ちいちゃんはよくがんばったと思いました。私だったら、ちいちゃんみたいになくなるのは嫌だあだけれど、ちいちゃんは天国に行ってお父さんやお兄ちゃんやお母さんに会えたから、ちいちゃんはとてもうれしいんだなと思いました。

L児：最初、戦争は人が死んじゃって、悲しいとしか思っていなかったけれど、今までの青い空や楽しさ、明るさも消えてなくなって、小さい時に命を落としてしまったりもするから、なんでそこまでひどいことをするのかなあとちいちゃんがとてもかわいそうでした。命を落とすだけじゃなくて、家や町もひどくやられてしまって、他の国の人は何を考えているんだろうと思いました。自分はこんなに大きくなれたので、交通安全に気をつけたり、日本と外国の人にもっと仲よくなってもらいたいです。私も交通安全に気をつけたり、不審者に気をつけたり、病気にならないように健康に生きていけば、人生はもっともっと楽しめるものなんだなあと思いました。早く死んじゃったちいちゃんのためにも、がんばって長生きしようと思います。

N児：初めて戦争の怖さ、悲しみを伝えられました。初めは「戦争って嘘なんじゃない？」と思っていました。でも、このお話は違いました。「ちいちゃんのかげおくり」は「戦争はあってはならない。」と伝えてくれたお話でした。だから、今の平和なくらしを大事に、そしてありがたく過ごしていきたいです。そして、戦争でなくなってしまった人たちに「今のくらしはとても平和で、楽しいくらしだよ！」と心の中で伝えてあげたいです。

O児：命はすごく大切だと思った。ちいちゃんは空に命が消えてかわいそうだった。自分は戦争は家族と離れるから嫌だと思った。戦争は子どもや友だちや大人まで死んじゃうから危険だと思った。

P児：ちいちゃんは、最初は家族みんなでかげおくりをしていて楽しそうだったけれど、お母さんやお兄ちゃんとはぐれちゃってかわいそうで、しかも家や町も戦争でやけちゃって、最後はまだ小さいちいちゃん自身も死んでしまって、すごくかわいそうで、でも、最後はお母さんやお兄ちゃんやお父さんと空の上で会えたのでよかったけど、とても悲しいお話だと思います。

Q児：戦争でちいちゃんだけじゃなくて、小さな子どもの命や大人の命がいっぱい消えているから、戦争が起きないで欲しいと思った。

R児：自分だったら、死んじゃうし、空襲に巻き込まれるし、みんなに会えなくなるから嫌だ。食べ物がなくなるから嫌だ。ちいちゃんは生き残っても死んじゃうからかわいそうでした。失ったものが多いからかわいそう。一人ぼっちだし、防空壕の中

で一人ぼっちで寝たり、ほしいしか食べられないでかわいそう。

T児：ちいちゃんのかげおくりは、かげおくりっていう遊びをちいちゃんに教えてくれたのはお父さんで、いいお父さんだと思いました。でも、戦争でほとんどやられて、ちいちゃんの家族もやられて、だから戦争はもうやだなと思いました。あと、ちいちゃんも戦争でやられたけれど、最初に家族でかげおくりをやって楽しそうなちいちゃんを見られてよかったと思いました。音楽会では、みんなに「戦争はやだな。」っていう気持ちをみんなに教えてあげるようにがんばって歌います。

【考察】最後の授業で、「ちいちゃんのかげおくり」を学習して思ったこと、考えたことを話し合った。ここからも、子どもたちがちいちゃんの気持ちやその時の情景を思い浮かべ、その意味を考え、実感することができたと考える。

## 二 本単元の学習を通して

繰り返しとなってしまいが、様々な場面でのちいちゃんのことを考える中で、子どもたちは、自分が迷子になった時や一人ぼっちになった時のことを想起するなど、小学3年生なりに、「自分のこと」として、ちいちゃんのことを考えた。また、第一場面と第四場面の「かげおくり」では、どちら「かげおくり」の方がちいちゃんにとってうれしいかを考え、さらに、どちらの「かげおくり」の方が幸せかを考えることで、深めた。そこでは、双方の立場の子どもともこだわって話し合った。これらの活動を通して、子どもたちはちいちゃんに思いを寄せ、戦争はちいちゃんからお父さんやお母さんやお兄ちゃんを奪い、ついにはちいちゃんの命をも奪ってしまうという戦争の悲しさを実感し、そのような悲しさのない平和な暮らしを願う姿を培うことができたのではないかと考える。また、一生懸命考えた、ちいちゃんの切なさや悲しみ、うれしさを実感したりしたこと、最初はやや消極的であった音楽会への思いも培うことができたのではないかと考える。

また、今回は、子どもたちのこだわる姿によって、自分の考えを変えられた。とかく、指導書等に沿って学習を進めてしまいがちであるが、教師の惚れ込んだ素材を、きちんと考えて展開すれば、子どもたちは、より熱心に取り組む。それにより、子どもたちは学び合いながら、より深い学びを行った。こちらの都合で進めてきたことを反省させられた。

また、今回は、視聴覚機器を使えないないということなので、放送することができないが、このような学習を行ったが子どもたちは、音楽会で、ちいちゃんに思いを寄せ、「ちいちゃんはかわいそう。」「お母ちゃんに会いたい。」「戦争は嫌だ。」などの思いを精一杯表現することができた。そして、合唱に関しても精一杯表現し、それが認められることのよさも実感することができたようである。